

VI 植生自然度図を基礎とした藤沢市の緑の自然環境診断

Diagnose der grünen natürlichen Umwelt in der Stadt Fujisawa auf Grund der Karte des Natürlichkeitsgrades der Vegetation

藤沢市の緑は、1971年に比較し、湘南ライフタウン地域を除き、自然度Ⅳ～Ⅴ地域では大きな面積の差はない。とくに自然度Ⅴ地域については、1971年とほとんどかわらずに残されている。現地調査中気がついたことは、自然林が、あるいは自然に近い林分が残されており、調査に林内に入ると、藤沢市保存樹林によく指定されていることである。1971年の調査に引きつづき1972年に植生自然度図、立地図の作製が行なわれ、環境保全林指定地域が提案されたが、植生調査結果の資料を大変よく利用し、保全樹林に指定されていることは緑の行政が高く評価される。

藤沢市は1971年に比較し人口は8万人以上の増加があったにもかかわらず、自然度Ⅴ、Ⅳ地域が、比較的残されていることは、驚異に価する。自然度Ⅱ地域すなわち耕作地は、多かれ少なかれ、住宅地他の土地利用に供される地域であり、今回もその減少が地図上より読みとれる。今後共、樹林については保存、保全がよく行なわれると考えられるが、自然度Ⅱの耕作地、すなわち生産緑地についてもこれから新しく、どのような災害時にも、藤沢市民が長続きできる最少限の生産地を確保しておく必要があるのではなかろうか。また自然度Ⅱの減少に伴い、自然度Ⅰの増加がわずかに目立つ。したがって、公園、並木、工場や公共施設周辺の緑（環境保全林）を広げ、点と線でみどりを網目状につくり、昔からの集落が、みどりの多い住宅地として存続するように、緑の網を藤沢市の市街地にかぶせたい。そのためには、市長をはじめ都市計画課、みどり課、その他藤沢市行政職につく人たちが共に藤沢市全体の緑を再度見直す必要がある。1971年から10数年間に残されてきた緑は子孫代々受けつぎ、保護への市の努力と共に、これからは緑の環境創造に全力を投入してゆく必要性が、植生自然度の配分から明らかにされた。

藤沢駅周辺、湘南ライフタウンの一部では緑が多く復元され、街の並木も市役所周辺では花木と郷土林構成種との組み合わせによる理想に近い緑の環境創造が行なわれはじめている。これらを拠点として、広く藤沢市全体に広げてくことが期待される。

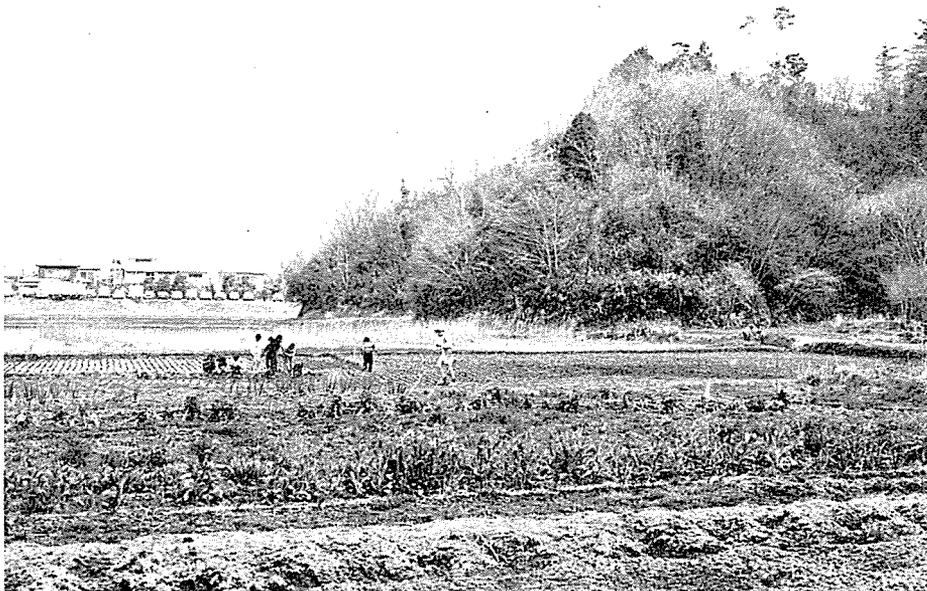


Fig. 61 郊外に残されている田園景観。子供達の課外授業の場として利用されている（川名市場 海拔8m）。

Noch am Rand erhaltene Landschaft, die heute für den Gelände-Unterricht der Schulkinder benutzt wird (Ichiba in Kawana 8m ü. NN).



Fig. 62 雑木林（オニシバリーコナラ群集）と水田景観（川名 7m）。
Sekundärwald vom *Daphno pseudo-mezerei-Quercetum serratae*
und Reisfeld-Landschaft im Vorfrühling (Kawana 7m ü. NN).